

舞踊と文明

モーリス・ベジャール

踊るということは、何よりも伝えること、相手と結びつき、一体化して、自分の存在の深淵から語りかけることです。舞踊とは結合です。それは人間と人間との結合であり、人間と宇宙との結合であり、人間と神との結合なのです。口で語られる言葉は、幻想の領域を脱することはできません。言葉は、私たちがそれを理解したと思っても、私たちが欺くようなイメージを隠し持っているために、私たちをバベルの塔のように、どうどうめぐりの意味論の迷路へと誘い込んでしまうのです。人間は、長く話し合えば話し合うほど、完全に合意するより、争いになってしまうことの方が多いのです。

また、踊るということは、動物の言葉を話し、石ころとコミュニケーションし、海の唄う歌や、そよぐ風を理解し、星と共に夜空を探索することであり、存在の極致に近づくことでもあります。踊ることは、私たちの人間という貧しい条件を完全に超越して、宇宙の深遠な営みに全身で参加することなのです。

どのような文明でも、その黎明期において、人間は裸足で地面を怒り狂ったように踏みつけていました。そこからリズムや音や空間や神に憑かれたような状態が生まれました。そしてそれが目に見えない力と結合し、舞踊が生まれたのです。

様々な文化の伝統的なルーツを注意深く研究してみると、そこには必ず舞踊があり、また舞踊が次のような2つの異なる、互いに補い合う側面を持っていたことが分かります。

1. ソロの舞踊家:これは神官あるいはシャーマンあるいは秘伝を授かった人間です。彼は、自分の属している民族、部族、あるいは村の持つあらゆる力を一身にあわせ持っています。彼は踊ることによって、神や本質や存在とコミュニケーションします。彼は神と人間の仲介者です。神聖な舞踊は一人で踊る舞踊であり、その舞踊において、舞踊家である男性あるいは女性の神官は、自分が属する人類を代表し、属する集団の持つ全てのエネルギーを自らが司る典礼に込めているのです。

2. 集団の中の舞踊家:同じ一つの民族あるいは経済、文化の集団に属しているという集団への深い帰属感は舞踊を創り出します。この舞踊において、人間は自分が同じ伝統で結ばれている社会的共同体の一員であることを主張するのです。こうして私たちは、舞踊のたどってきた根源的な方向の中に2つの側面を見出します。

神聖な舞踊:神聖なもの、目に見えない力とコミュニケーションする孤独な人間。

社会的舞踊:同じ一つの地理的、文化的な共同体の持つあらゆる絆で結びついた人間の集団。

舞踊において、足はエネルギーやリズムを与え、音楽を先導、あるいは音楽に合わせて動きます(実は音楽は舞踊の実現にすぎません)。

手は、自らのメロディーや花や蝶や炎などを表現し、また社会的な舞踊の場合には、手は相手の手と合わさり、結び合って集団をつくり、輪舞やファランドールやカドリユ、そしてスクウェア・ダンスとなります。

1960年代半ばに、私はインド旅行に出かけました。ごく幼い頃から、父親のおかげで、インド大陸は私にとって未知の遙か彼方にある土地ではなくなっていました。それに、当時は、私たちがお金に不自由していたこと、戦争やドイツによる占領などによって、フランスのいくつかの都市も、インドと同じくらい、行きにくく、ほとんど神話的な場所であることに変わりはありませんでした。また、バガヴァド=ジッタは、モリエール、ニーチェ、ボードレールと並んで、私の愛読する作家でした。これは今でも変わっていません。

実際、インドは、多種多様な気候や人種や宗教、そして土着や外来の文化などが合い交わる亜大陸です。ケララからラジャスタンを経てヒマラヤへ行くことは、ちょうどモロッコの南部から、航海者なら誰でも夢見る、水と緑がみずみずしい花や果実を育んでいる熱帯の魔法の島々に立ち寄り、あの小さなモン・ブランにひとつとびするような、変化に富んだ旅なのです。そのようなわけで私はインドへ旅立ちました。何を探し求めていたのかといいますと、何よりも正真正銘のヨガの師範に出会い(なかなか探し出すのが難しいのです)、その師の教えのままに、それまで体験したことのない、無為ののらりくらりと暮らす道にいざなわれたいと思ったからです。

幸い、ヨーロッパに住んでいたインドの友人たちが、私にヨガの師範の一人への紹介状を書いてくれました。ヨガの師範は目に見えない存在です。それはなにも彼らが隠れ身の魔術を使うからではなく、ヨーロッパ化あるいはアメリカ化された「グル」とは違って、彼らが普通の人と同じように見え、物事を見抜く鋭い慧眼を持っていること以外には、毎日すれちがう人と少しも変わったところがないからです。

こうして私はヨガの師範と出会いました。

「どうしてヨガをやりたいのかね」

「ヨガをやるのが、これから私が自分の生活を築き、仕事で上達する助けになると思うからです(言うまでもなく、このような対話ができしたのは、若い学生の通訳がいたからで

す)」

「君の仕事とは何かね」

「私は舞踊家です」

「舞踊は神々から授かったものだ。シバ・ナアハラジャは舞踊の神だ。舞踊はむずかしい芸術だ。君の舞踊とはどのようなものかね」

私は、当惑して、しどろもどろな説明をしました。実を言えば、私自身も自分の舞踊がどのようなものか分かっていなかったのです。

「私が思うに、君は毎日、身体を鍛え、練習をしているのではないかね」

「はい、もちろんです」

私は、自分がしている練習を、どう説明すれば良いのか分かりませんでした。

「やってみせてくれたまえ」

私は、私たちがじかに床に座っている屋根付きのテラスの周りを、ぐるりと囲んでいる木製の手すりに目を留めました。

「そうですね。私たちは手すりを使って練習をしています」

「ではさっそく、やってみたまえ」

私は、緊張のあまり、深呼吸をしました。自分の舞台の初日よりもあがっていたのです。そして師の正面に、手すりを握って立ちました。インドではめずらしいことですが、床は入念に磨きあげた自然のままの木できていましたが、すべりやすいこともなく、シンプルで洗練された動きをすることができました。

40分経っても、ヨガの師範は、身体も視線も少しも動かすことはありませんでした。私は汗だくになって、言いました。

「私たちはこれを毎朝やっています。バーレッスンと言います」

長い沈黙がありました。

そして、ヨガの師範は言いました。

「それで、なぜ君はヨガがやりたいのかね。君の精神が自由に働き、身体は真っ直ぐだが、緊張で固くならず、君が身体を動かそうとするのではなく、身体が動くままにして、その動きの美しさと真実だけを求めているのであれば、それが君のやりたいというヨガなのだ。それ以外のことを求めてはいけない。君が言う“バーレッスン”を、うまくならうなどと考えず、ただその美しさのためにだけやりなさい。うまくならうとする気持ちを捨てなければ、進歩することはできないのだから」

この日から、私にとって、バーレッスンは、一つの技術や様式、ある特定の舞踊の形と結びついたものではなくなりました。それは、私の身体と精神を築くヨガであり、あら

ゆる舞踊の形を理解する可能性を開くものになったのです。なぜなら舞踊はたった一つしかないからです。

伝統芸をどのようにして、いわゆる芸術家の世界へ移行させるかということが常に問題となります。

しかし、エジプトやヨーロッパやアジアの寺院をつくったのは誰でしょうか。

インドや、アフリカやバリ島で、自分の舞踊に署名をした芸術家がいたでしょうか。署名するということは、それがどんなに偉大な芸術家によるものであれ、進歩なのでしょう。

伝統芸は、永遠にあらゆる創作の発想の源であり続けるでしょう。そしていわゆる「芸術家」(私も無論その一員であるわけですが)は、常に人間という存在の根源的な伝統に、新しい可能性を求め続けずにはいられないでしょう。神聖なるものの持つ深い意味や、社会的な要素としての舞踊への民衆の寄与なくしては、私の芸術は全く意味がなくなってしまう。私は、現代文明という長い鎖の一環でしかなく、この文明は時には進歩することもあります。多くの場合、それは見せかけだけの進歩であるにすぎないのです。

模索を続けていた私にとって、一つの啓発となったのは、1960年代に日本を見出したことでした。実際、かなり若い頃から、私はこの「日の昇る国」の文明に魅了されました。私は清少納言を読み、奈良や京都の彫刻や寺を探索し、溝口監督や黒沢監督の映画を見て、その美しさと知性に深い感銘を受けていました。日本が大きな近代化のうねりの中にあり、多くの分野で技術的な成功を収め、ヨーロッパとは異なっていますが、それが常に大胆で現在の世界の前衛にあることを聞いていました。私ははじめに、日本の演劇である能や歌舞伎、文楽など、言葉や舞踊や音楽や空間に対する感覚によって全てが構成されている舞台芸術に関心を持ちました。私が日本の演劇のとりこになったのは、それが古典的な形態でありながら、あまりにも現代的であったこと、そしてこれらの演劇や舞踊が、私をはじめヨーロッパの演劇人が必死に探し求めていたものにほかならなかったからです。抽象的で叙情的な現代性(モデルニテ)に貫かれ、たしかに古い舞踊ではありますが、それと同時に何よりも永遠の舞踊である「能」の舞台を見た後では、巨大なビルやエレクトロニクスや新幹線や広告や、使い捨ての安物の商品の氾濫の方が、かえって別の時代から出てきたようで、いわゆる日本の伝統芸術は、まさに未来の文明の「極致」だと思えたのです。

物質的な「進歩」は、見かけだけのことが多く、真のモデルニテはモダンという言葉がこれほど頻繁に使われている現代ではなく、別の時代にこそ見出すことができるので

す。

パンテオン寺院はモダンです。シェークスピアはモダンです。ヨハン・セバスティアン・バッハはモダンです。伊勢神宮はモダンです。

それに舞踊の本質とは、私たちの心の鼓動であるリズムによって時間を超越し、人間的なものに永遠性を再び見出すことにあるのではないのでしょうか。